

研究テーマ ● 飛沫転石帯の保全と開発に関する研究

水産学部・水産学科・水産生物 海洋学分野 教授 鈴木 廣志

研究の背景および目的

海から陸への移行地域である飛沫転石帯は、護岸建設や海岸道路建設のために減少・消失しつつあります。飛沫転石帯は従来、動植物が生息し難い不毛の場所と考えられていましたが、近年希少種や陸生種の子どもが生息していることが明らかにされつつあります。

本研究は、この飛沫転石帯の役割を明らかにして、その保全と適正な開発、さらにその復元を目的として実施しています。

■ おもな研究内容

・ どんない生物が生息しているのでしょうか？

鹿児島県本土から種子島、屋久島、奄美大島、石垣島の飛沫転石帯を定性的に調べたところ、陸生、半陸生のヤドカリ類、カニ類が多数出現しています。とくに、天然記念物のオカヤドカリ類や、レッドデータブックに掲載されているムラサキオカガニ（環境省版）、ヤエヤマヒメオカガニ（沖縄県版）などが生息していることが分かってきました。

・ 今後の予定

飛沫転石帯のどのような環境要因（転石のサイズ、転石の位置、etc.）が重要なのか。生息種がどのように利用しているのか（生涯利用しているのか、一時的生息地なのか、etc.）を解明します。



ムラサキオカガニ



飛沫転石帯のある自然海岸



ヤエヤマヒメオカガニ

期待される効果・応用分野

本研究は基礎研究ながら、自然と調和した開発が望まれている今、その成果は適切な海岸護岸の建設を促すものとなります。

また、消失した飛沫転石帯の復元を可能とする有用な成果が得られるため、新たな事業の展開も可能とするものと期待されます。

■ 共同研究・特許などアピールポイント

● WWFジャパン（世界自然保護基金）の支援の下南西諸島の多様性調査に参加しています

🗨️ コーディネーターから一言

海から陸への移行地域である飛沫転石帯が希少種を含む生物の生息地であることを確認。役割を明らかにすることで、海岸護岸工事に際しての自然の保全と適正な開発、さらには復元を可能にする研究です。

研究分野

甲殻類学、生物地理学、保全生態学、復元生態学

キーワード

飛沫帯、転石帯、オカガニ類、オカヤドカリ類、希少種、海岸護岸